

カンボジア 工場労働者のための子宮頸がんを入口とした 女性のヘルスケア向上プロジェクト

Newsletter from SCGO-JSOG Project on Women's Health and Cervical Cancer

No. 9 July 2016

日本産科婦人科学会員の医師による実地指導

7月11～17日の間、徳島大学より桑原医師と阿部医師が派遣され、プロジェクト対象のクメールソビエト病院、カルメット病院、国立母子保健センター病院でコルポスコピーの技術指導、下平式高周波手術器の設置確認と使用法の説明などの活動を行いました。

また、カンボジア産婦人科学会事務局においてミニセミナーを2回開催しました。

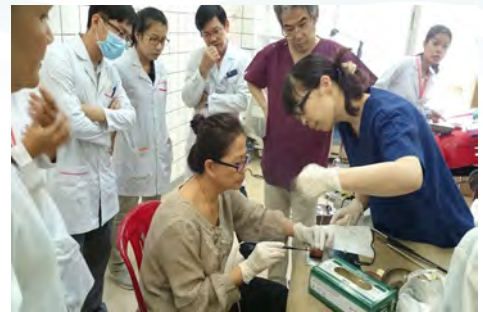
さらに、11月に開催予定のカンボジア産婦人科学会年次学術集会における抄録提出フォーム作成、座長の役割、小児科学会との共同セッションの持ち方等の学会運営に対する支援を行いました。

JICA 草の根技術協力事業として日本産科婦人科学会が先月から開始した医師派遣の第2陣として、2016年7月11日から一週間、カンボジアの首都プノンペンにある国立3病院（クメールソビエト病院・カルメット病院・国立母子保健センター病院）での支援を行いました。各病院では、本プロジェクトで寄贈された下平式高周波手術器を設置し、バナナやソーセージを用いた操作訓練を行いました。第一陣の慈恵会医科大学の先生方の指導を受け、新しい機械を待ち望んでいた医師の意欲には並々ならぬものがあり、予定時間を超えて、各医師が取り組んでいました。さらに各病院で前回に引き続き、コルポ診の指導を行っていたところ、LEEPの適応となるCINの症例に遭遇しましたので、寄贈の機器が始めて臨床使用されることになりました。言葉も医療環境も異なる外国で、アドバイスのみとは言え、このプロジェクトに参加する緊張感は想像をこえていましたが、現地医師の真剣な態度と熱意を感じることができました。病理結果は次回、慶應義塾大学の先生と一緒に検討する予定です。

月曜と木曜の午後はカンボジア産婦人科学会事務局（国立母子保健センター病院内にあります）でセミナーを実施し、コルポ所見と臨床診断のQ&Aと、LEEPに関して具体的な細かい点まで質疑応答を行いました。自費診療が基本であること、患者の収入や交通手段にも制限があること、病理診断のインフラが整っていないことなど、前提が大きく異なるため、お互いに戸惑う場面もありましたが、意見を交換し、我々が刺激をうけることも多くありました。

本事業は、3年間の計画とこのことですので、カンボジア産婦人科学会の発展と、日産婦の今後の協力が期待されています。最後になりましたが、継続して現地対応いただいている松本安代先生と大石博子様へ深く感謝申し上げます。

徳島大学産科婦人科 桑原章・阿部彰子



(写真) 下平式高周波手術器の実習



(写真) ミニレクチャー風景



(写真) 感謝状授与式



(写真) 感謝状授与式後の集合写真

健康教育教材の作成活動

5月30日から7月22日まで健康教育教材作成の専門家として大石博子専門家(助産師)が派遣されました。カンボジアの病院や NGO 等での視察や情報収集、関係者との意見交換を通じて、工場用の子宮頸がんに関する健康教育教材(案)を英語とクメール語で作成し、また、子宮頸がんに関するリーフレットを作成しました。

子宮頸がん検診普及啓発パンフレットの作成

プロジェクトで実施した女性工場労働者の子宮頸がんに関する意識調査では、多くの人が「子宮頸がん」という言葉は聞いたことがあるが、その原因について誰も知らず、また子宮頸がんについての情報源の多くは親戚や友人からという結果でした。子宮頸がんという病気について認知されているものの、医療者などから正しい情報を得る機会が少ない状況が考えられ、子宮頸がんについての正しい知識と検診の重要性を理解してもらうため、健康教育教材を作成することになりました。

その準備として、国立病院や NGO を視察し子宮頸がんに関する健康教育についての現状を調査し、教材として多くの女性の目に留まるようパンフレットを作成することとしました。また SCGO の医師、特に理事とインプリメンターチームの医師達と幾度となく会議をもち、内容の検討のほか簡潔でわかりやすいクメール語かどうかを何度も確認して頂きました。また事前に地方の女性を対象に教材を試用してみることを提案頂き、コンポンチャム州保健局のご協力の元、州病院や保健センターでプレテストを行いました。

コンポンチャム州は、プノンペンの北東約 120 キロに位置し、メコン川が流れゴム農園などが広がる農業の盛んな地域です。近年施設分娩が急激に増え、地方の第三次病院であるコンポンチャム州病院でも年間4千件以上の分娩があります。お産には、産婦の世話を交代でするために産婦の母親、姉やおばなどを含め大家族で病院にやってくるのが常。州病院では、手伝いに来ていた女性たちを集めて子宮頸がんのミニ教室を開きました。女性の病気、ということもあり、参加した方がたは熱心に耳を傾け、HPV ワクチンや検診のできる場所についての質問もありました。しかし様々な情報や数字などは混乱させるようでもあり、必要最小限の情報に絞ることにしました。伝えたいメッセージを簡潔にして「子宮頸がんは性交経験のある女性はだれでもかかる可能性があります」「子宮頸がんは知らない間に進行し、誰がかかるのかもわかりません」「子宮頸がん検診を定期的に行きましょう」という3つにし、できるだけ多く図をいれました。また SCGO の医師達が、子宮頸がんを伝えるのにふさわしいテーマカラーは？カンボジアの女性たちが興味を持ってくれそうな写真は？と考え、女性らしい紫を基調色とし笑顔の働く女性を表紙にしました。このパンフレットを通して、多くの女性が子宮頸がん検診に興味を持ち、検診を受けてくれることを願っています。

大石 博子



(写真) 病院で情報収集



(写真) インプリメンターチームの医師達との会議 (パンフレットサンプルを持って会議をしているところ)



(写真上下) 出来上がったパンフレット

プロジェクトを取り巻く動き

- 5/30-7/22 : 大石博子専門家(健康教育教材作成)カンボジア派遣
- 7/5 : SCGO 理事会
- 7/4-7/17 : 松本安代医師カンボジア派遣
- 7/11-7/17 : 徳島大学より桑原章医師、阿部彰子医師カンボジア派遣